

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）



編輯 森野長 發行 山田上野 印刷 市田上野 校學門專 會 町縣南市野 社會式株聞新日每通信 所刷印

### 新卒業者諸子に餞す

（第十九回卒業證書授與式に於ける）  
針塚校長の式辭

本日當校第十九回卒業證書授與式を舉行するに當り文部大臣閣下より祝辭を賜はり貴賓客位の貴臨を辱うしたるは定に本校の光榮にして深く感謝するところなり。

本日卒業證書授與せらるべきものは

- 養蠶科 本科 三十五名
- 製絲科 本科 三十七名
- 絹絲紡績科 本科 十二名
- 選科 一 名
- 選科 四 名
- 選科 一 名

合計九十名なり。

諸子は入學以來克く校規を遵守し教訓に従ひ所定の各科並に實習を修得し精勵努力の功酬ひられて此の榮譽を荷へるものにして當校は諸子の父兄と共に此の喜を俱にすることを衷心満足するところなり。

凡そ非常時には之に對する非常の決心なかるべからず、今や我國は空前の困難に直面し内は極度の經濟難に類み險惡なる思想は社會の裏面に潛

行せんとするあり、外は帝國の死命線に立ちて滿蒙及日支問題を一期に決せんとす、舟楫一度摧裂すれば其の歸趨するところ亦知るべからざるなり、加之世界の列強は較もすれば

舉つて我正義擁護の行動を干制せんとす、國民の最大緊張心を求め其の一致協力を要すること實に今日より急なるはなし國民の至誠奉公の實を期待すること亦實に今日より切なるはなし、諸子の同志先輩及學友も現に身命を賭して困難に赴き祖國の爲に戦ひ我等同胞の爲に奮闘しつゝあるにあらざるや、此の國家多事多難の時に當り諸君は業を母校に終へ出で、將に社會の實務に就かんとす張膽明目渾身の力を振起して此難局を突破するの概なくして可ならんや。

余は信ず諸子の平素の行動に鑑み諸子は必ず進んで此の難局に磨り挺身救國の爲に決して人後に落ちざるの大決心あることを、諸子は此の大決心を以て各自の専門たる蠶絲紡績業

の救濟仲展の任に當るべし其の直接たるの間接たるとは境に依りて異なるのみ唯夫れ全力を盡くされよ。抑々人は單純なる肉塊に在らずして内に靈妙驚異の力を藏す故に一度奮興起するときは平素に數倍するの體力を現はし驚くべき精神力を發揮

山本三郎著  
化學純絹絲の工業的完成  
Y0.30

蠶絲科學研究會編  
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其の現況  
Y1.50

菅原治著  
蠶絲業法規要論  
Y2.30

市田上野縣野長  
會究研學科絲蠶 所行發  
(振替長野6413番)

諸君、彼れ張學良が英國や米國の執政者でありましたら、英國や米國、或は佛國の國民は彼れを一日でも置く事て出来るだらうか、故に東北民衆は只二つの方法があります。一つは忍んで死を待つか或は起つて彼に反抗するの外のいのであります。然し彼れには數十萬の虎狼の如き軍隊を持つて居るから、手に寸鐵を持たぬ民衆はどうして彼れを排除する事が出来ませうか、幸ひに天祐とも云ひませうか、彼れは東北民衆を壓迫する手段を以つて隣國たる日本人民をも壓迫したるが爲め、九月十八日の事變を惹起したのであります。九月十八日の事變は皆張學良と彼れ一

### 事變後に於ける滿蒙の動向と新國家の建設（續）

（在滿洲）湯川秀夫

し得べし、然れども之れ一に當時の修養に俟つべきものとす諸子は宜しく精進努力の効を積み不斷の修養を重ね以て自己の大成を期すべきなり夫れ事業は人物なり人を得て事業は興り人失はれて事業頽る、諸子にして克く彼の大決心と此修養とに依りて人格を向上せしめ以て渾身の力を致さば現下の難局の救濟亦必ずしも難きにあらざるべし。余の切に諸子に望むところは即之れなり、茲に諸子の社會への發程に際し前途を祝し幸福を祈り此の言を呈して餞となす諸子幸に自重自愛せよ。

昭和七年三月十五日

上田蠶絲專門學校長  
針塚長太郎

黨の起した事、東北三千萬民衆の受けた損害及苦痛も亦、皆張學良と彼の一黨の招いたものであります。日本軍隊は唯だ張學良と彼の一黨に對してこそ、怒みはあるけれども、決して東北人民に對しては怒みがありません。東北人民も亦張學良と彼れ一黨は怨むけれど、日本軍隊を怨まないのであります。日本軍隊が張學良の人民を迫害する其軍隊を滅したるがため、東北人民は大悪人の手から救ひ出される事が出来たので、我が東北人民は日本軍隊に對して深く感謝する次第であります。吾等は既に張學良及び彼のれ一黨の暴力から救ひ出された。依つて吾

等は民族問題として吾等の明るく生存する途を開拓しやうと思ふてこゝに新政權を立てたのであります。以下略

趙市長の演說中にも明かに宣言せられて居る通り、滿蒙の新國家出現は、東北四省民の自らの生存保全の爲めに於ても全く緊要なる事である。従つて以上の如く張學良一味の政治に、叙上の如く認識して居る有志等は事變を機として舊軍閥との絶縁を即座に決意し、以つて三千萬民衆の生存保全に協力されたのである。従つて事變直後、吾が土肥原大佐が奉天市長に就任したのは奉天省全民衆の要望もだし難く就任したのである。其の後奉天地方維持委員會が創設されるに及んで、土肥原市長は直に趙欣伯氏に席を譲つて支那人獨自の力に依る奉天省及び奉天市の治安維持に當らしめたのである。而して張學良に不斷の不平を藏して居たる全省の民衆の爲めには急速に新國家を結成するにあらずんば、彼等に平和と幸福の保全、難きを認識する于沖漢氏、袁金鐵氏、趙欣伯氏等は後述の如き理論の下に新國家への段階として聯省自治運動を意圖し、直ちに實行に着手し、十一月于沖漢氏を首班とする奉天省自治指導部が結成されたのである。

### 七 自治運動の發生及過程

事變後滿蒙の全省民の間に澎湃として高調された輿論は、全東北民衆の生活を保全する前提とせる保境安民である。これは張學良政權が奉天に解消すると同時に形體をハッキリとして出現したのである。即ち聯省

自治運動の實行であつた。この運動は革命時の建設運動としては、兎も角、支那社會に在りては歴史的に檢討された方法論の一つである。即ち、支那に於ける傳統的自治機能を大觀すると第一に組織の重要な位置に家族が在る。而してこれは血族的に擴大された、宗族が存在するのである。この組織の長所は敬宗、收族と云ふ點で敬宗は、祖先崇拜であり、收族は自身等一族の貧者を引き取り扶養することである。

これが支那に於ける社會構成の重要な部分を占めるもので、この次ぎは、家族が幾つか集つて自然部落を成し、これが經濟的な條件に應じて聯合する、それが聯莊と稱するものである。大體これが農村社會に於ける組織であるが、都市に於けるを觀別すると二つある。一つは、地域的に構成される前述の組織であるが、一つは經濟的、職業的に構成される。同業組合(ギルト)(支那では帮と稱す)がある。これが聯合したもの、即商務總會等である。今回の聯省自治運動はこの組織を擴大し前進せしめて縣を中心とした自治機體を確立し、更らに國家へ迄擴大せしめて國民生活の保障を期するものである。故にこの運動は、地域的には縣の自治を建設し、これが出來たら、縣自治全體の聯合自體である省を自治し、次は國家組織である。斯様に始めて民衆の力——國體の力に依りて、自らの生活を保全ならしむる自治の完成が期されるのである。この理論を提唱された者は、現奉天省自治指導部長、于沖漢氏である、于氏は三千万民衆の生活を保障

せむとせば、斯の手段に依り、國內を組織化し以つて、保境安民の實行を意圖されて事變直後、軍閥政權の崩壊するや率先してこれを提唱し實行運動に着手し今日に於ては、次章に書く通り雖然として着々結成へと進行形體を見せて居るのである。

### 八 在滿民族啓蒙運動

事變後の滿洲政權を何うするか、これはかなり考究されて來た問題にて、最近に至り滿洲獨立政權の樹立では結局舊軍閥時代に逆轉する虞があるため、滿蒙は支那本部より切り放して獨立した滿蒙新獨立國家を樹立しなければならぬと云ふことに一致して來たやうだ。現に東北方に於ける支那側の代表的意見の保持者たる地方自治委員會の于沖漢らも「舊軍閥の霸道政治の惡魔がびびて東北には眞に政治革命の時機が來た。軍閥政治を打破して新に民意を基調とする善政主義を實行しなければならぬ。そして其の新旗幟は絶對的保境安民主義にあり、其れが爲めに舊軍閥政權および南京政府と完全に絶縁せる新國家を建設することが絶對要件である」と云つて居る。そこで問題になるのは新國家の國體問題であるが、此の點に就ては帝政共和政ならびに其の中間的性質を有する虛君共和制(袁金鎧氏の命名にかゝる)の三派に分れ、また政治組織についても聯省自治とするか中央集權制とするかと云つた研究が支那の有力者間に進められて居るが、いまだ最後の決定を見るに至つてゐない様に見られてゐる、だが少くとも「滿蒙自由國」案なるものが最近有力

者の間に速に擡頭しはじめたことを見逃す譯にはゆかない。然らば「滿蒙自由國」案は一體如何なる綱領を有するであらうか、それは大體に於て

- 一、軍閥專制政治を排して文治主義をとる。
  - 二、民主政體をとること、大總統制委員長制のいづれをも固持せず要は民意に本づく善政を行ふことを目標とする。
  - 三、立憲政體をとること、憲法を作り、立法、司法、行政を分立せしむると同時に代議政治を布き議會をして國政と立法に參與せしむることを必要とする。而して民衆の政治意識の低き現在に於て議會に多數を制する政黨をして内閣を組織せしむることは必ずしも策の得たるものではない。
- 等の諸點に焦點がおかれ、こゝに目標と興味と特殊性が閃いてゐる。更にまた興味ある點はこの案が
- 一、滿蒙獨立國を奉天、吉林、黑龍江、熱河、東省特別區、蒙古自治領の六省に分つこと(東省特別區は吉林省に編入すべしとの説がある)
  - 二、省區の下に縣、市を置き、支那特有の自治制を採用する。
  - 三、先づ聯省自治的基礎の下に、中央政府を作り軍權、司法權、稅權等を統一して各省區の權限を漸次縮小する。
- ところにある。而して更に重大なことはこの新滿蒙自由國は國防軍を全廢して人民の負擔を半分以下乃至三分の一に減じて安居樂業の理想國を

創造すると同時に、ある一國をして經濟的獨專を行はしむることなく門戸開放、機會均等主義により廣く門戸を世界の前に開放して、外國の資金と技術を入れ資源の開發、産業の勃興に重心を置いてゐることである。

時局の進展に伴ひ、我國としても單に既得權の擁護をもつて満足するを得ず、滿蒙問題の永久的解決を目標とせざるを得ざるに至つた。この際支那側に於てかゝる進歩的諸策を有する滿蒙新獨立國の建設計畫の進捗しつゝある事實あることなれば此際「滿蒙に於ける日本の權益」二十幾年前の古證文を死文のまま、受容れることは出來ない。

滿洲に新國家を成立せしめて、其の新國家と日本とが軍事協定と經濟協定を締結して、それを支那始め世界各國が承認するといふ段取りでなければならぬ。これが只一つ殘されたる滿蒙に於ける日本の既得權益確保の方法である。

### 九 組織化された東三省

イ、奉天省(舊名遼寧省)政府  
袁金鎧氏等の遼寧地方維持委員會は、事變以來専ら地方治安維持にのみ關係し、行政方面にタッチすることをさけてゐたが、斯しては人心の不安艾動し難く遂に省政府の事務を代行することとなり、十一月六日左の如き聲明書及布告を發表した。

本會出で維持せり、既に聲明せる如く既往と將來は之を問はざるも目下の此の過渡期間に於て政權を代行し、全省の政令をして舊に照し施行し以て人心を安んぜしめざるを能はず  
即ち茲に聲明す

### 遼寧省地維持委員會 佈告

東三省事變發生以來政權停斷せるにより本會出でこれを維持せり凡ゆる交渉事件は既往を問はず又將來を問はず、但し此の過渡期間に於ては政權を代行し能はず、而して張氏舊政權及び國民政府と關係を斷絶し人民をして業に安んぜしめ、官吏の權限を命じ以て人心を安んぜしめんとす、各官廳各縣政府は本會の法令を遵守し切實に奉行し過まる勿れ特此佈告す

袁 金 鎧  
外十名(氏名省略)

又昭和六年十一月十日新奉天省政府の盛大な代行政式をあげた當日、主席袁金鎧氏のなした挨拶は次の如くである。

事變以來政治停頓せるにより治安維持の爲め地方維持委員會を組織し大局安定と共に解散の筈であつた。然る處令や治安維持の範圍擴大し政權を代行せざるを得ぬこととなつた。此の爲め余に對する世評は其の善惡を論ぜず敢て意とせぬ、余はたゞ民生保護のため公正純潔を旨としてこの軍事期間中政權を代行し、日支協力本省人民の幸福を謀らんと欲するのみ。

と政府は自治指導部を置き次の八綱を定めた。(以下次號)

### 聲 明

事件發生以來政權停頓せるにより

第十九回卒業證書授與式に於ける

文務大臣祝辭

卒業生諸子諸子ハ今回業ヲ本校ニ卒ヘ斬新ナル知識ト濃烈タル意氣トヲ以テ本邦實業界ニ其ノ歩ヲ進メントス國家ノ爲慶賀ニ堪ヘサル所ニシテ世ノ諸子ニ期待スル所モ誠ニ大ナルモノアリ

昭和七年三月十五日

文部大臣 鳩山 一郎

第十九回卒業式

母校第十九回卒業證書授與式は去る三月十五日午前十時半より講堂に於て舉行針塚校長の證書授與及式辭鳩山文部大臣石垣長野縣知事成澤上田市長伊藤縣會議員清水小縣蠶業學校長(中等學校校長惣代)金澤運平宮下智三郎(實業家惣代)岡村源一(同窓社長(新聞記者惣代)岡村源一(同窓生惣代)諸氏の祝辭卒業生惣代石曾根卯氏の謝辭等ありて午後零時半閉式。

- 養蠶科 (順序不同)
長野 赤羽 是壽 群馬 今井 武四
山形 小野寺克治 秋田 加藤 省三
長野 倉澤 文夫 長野 白川 孝昌
埼玉 武田 一好 長野 塚田 庸男
廣嶋 枇杷木瀧雄 朝鮮 朴 均宅
長野 松野 外史 福嶋 吉田 正雄
長野 池内 眞吾 長野 上原 安夫
岡山 梶田 隆 長野 香掛 久雄
福島 齊藤 軍二 愛知 鷹本 薫一郎
群馬 千吉良 幸 三重 辻本 勇

- 製絲科
長野 平尾 孝平 長野 細川 豊
沖繩 宮城 燕 長野 若林 榮
長野 石曾根 卯 岡田 岡本 正男
長野 春日 卓郎 長野 工藤 實司
愛知 神原 敏男 長野 竹内 博雄
長野 茅野 功 群馬 戸部 正久
栃木 福地董之助 三重 町野 巖
長野 山浦 卓郎
製絲科
長野 相場實志男 愛媛 井上 熊保
石川 延命 幸次 岡山 大木 定雄
長野 古平 庄衛 長野 關 三四郎
長野 武川 勇 長野 西山 省
長野 林 清一 山口 藤井 温彦
長野 宮下 幸三 長野 山崎 幹録
奈良 吉川 知則 長野 秋山武一郎
長野 井上 壯平 長野 小澤 正一
群馬 黒岩京次郎 長野 滋野 文雄
長野 瀧澤 幸司 長野 田中 四郎
熊本 林 宇一 長野 林 秀門
新潟 本間 茂鏡 長野 宮原 秀人
長野 山崎 保太 長野 井上 伊祐
岐阜 梅村 義一 長野 大石 唯男
山形 小關 悦郎 長野 下村忠一郎
群馬 瀧澤 芳樹 熊本 東家 明秀
長野 林 龜一 熊本 平山 俊夫
新潟 本多 懋 秋田 望月 弘

- 選科修業者氏名
養蠶科
長野 濱村 一彦
製絲科
熊本 加來 芳文 群馬 富岡 正男
宮崎 黒木 藤雄 岡山 鳥羽 誠
絹絲紡績科
島根 保々 鐵三
養蠶科 (順序不同)
長野 瀧澤 幸 長野 田中 守人

新入學許可者

母校本年度入學志願者總人員は四百十三名にして内詮衡の結果入學を許可されたものは左記九十名である。

- 養蠶科 (順序不同)
長野 宮平 義雄 長野 三井 清
熊本 中村 一喜 富山 鑑塚 好作
長野 水野 義男 長野 西澤 正一
長野 比田井政治 岐阜 服部 令吉
京都 大山 融 福岡 白土孫七郎
京都 小島 巖 鹿兒島 有川貞信
長野 横山 忠夫 鹿兒島 守屋一郎
長野 淺川 茂樹 栃木 羽吉 正雄
長野 吉池權五郎 岐阜 岡島 喜博
岡山 尾崎三三夫 長野 渡邊 喜博
兵庫 小林 茂 岡山 藤井 宗雄
長野 半田 義雄 福岡 原 松藏
長野 伊藤 幸男 愛知 鈴木 重孝
朝鮮 韓 治鍊 山形 鈴木正一郎
神奈川 山下武雄 長野 藤田 四郎
鹿兒島 酒匂景雄 山口 中坪 豊
佐賀 江口 嘉清 長野 赤羽七郎治
東京 青木 幹夫 長野 森山 甫
長野 坂口 育三 長野 青木 深
長野 田近 肇 岐阜 吉田 行男
新潟 鈴木 茂 長野 小松 武男
以上四十四名

祇園その他

確水 茂

祇園石段下
祇園の石段下と聞くといつも僕は特殊な慕しを感じる。勿論東山一帯の感じそれ自体が慕しいのであるが、とりわけ祇園石段下の感じが、勿論僕などは素寒貧だから一般の人達がなつかしがるやうな意味でなつかしがるのではない。電車あこのろろした電車が石段下へ通りかかると、何となくおだやかな気分がして来る。今でも京都を思ひ出したり、祇園小唄でも聞くと、すぐ祇園石段下のあたりが心のうちへ蘇つて来る。勿論所謂「京都の遊び場所」といふ意味ではない。あの邊へ行くと京都の気分そのものを代表した気分といつたやうなものを直感するが、その代表的な京都の気分そのものがなつかしいのだ。その石段下に水たきで有名な鳥岩樓といふのがある。そこへ一度、ただの一度行つたことがある。それは

確か加美さんの送別會の晩だつたと  
思ふ。その晩は珍らしく大阪から故  
向山隆福博士が見えてゐた。勿論八  
木博士も京都にゐられた時だから八  
木さんも出席してゐた。そこでは上  
田の洋行歸りが三人顔を合はせたわ  
けだ。しかもそれがみな海の彼方か  
ら日本へ歸つて來られた許りの時だ  
から、實に盛んなものがあつた。そ  
の時の僕は心のうちに「盛んなもの  
だ」と思つた。今思ふと、あのやう  
に盛んな宴會はなかつたと思ふ。そ  
してあゝした旺んな氣分を、今でも  
時々味ひたいと思ふことが屢々だ。  
その晩の、眞黒な顔の向山さん、眞  
白な顔の——僕にはさう思はれた  
——加美さん、ゼントルマンの八木  
さんが今だに僕の頭に明瞭に描かれ  
てゐる。そしてそれと同時に鳥岩樓  
の一室のあの賑やかだつた一室が目  
の前へ浮んで來る。

互君——  
京都の春にわかれてから二年。行  
かう行かうと思つてゐてまだ京都へ  
行つて見る機會を興へられませぬ。  
この分では、いつたいいつになつた  
ら行かれるのか全く見當がつかませ  
んよ。そのうちに是非一度は行つて  
見たいと思つてゐます。

共済部を通して興へられた料理店  
「白鷹」のピラマキの仕事を見と互君  
と二人でやつたことを思ひ出してゐ  
ます。確かあの時は千枚まいで五十  
錢だつたと思つてゐます。一時間に  
千枚三時間で三千枚マイで、一圓五  
十錢貰つて、あの失業時代の四日分  
程の生活費をかせいでむしように喜  
んだことを思ひ出してゐます。

卒業を間近に控えた學生諸君の昨  
今はどうですか。學校卒業生の羽の  
生えて飛んだ時代には、卒業といへ  
ば素ばらしい愉快なものだつたさう  
だが、僕の経験によるとちつとも愉  
快ではなかつたのですが、今年あた  
り卒業する諸君は、いつたいどんな  
氣持ちでゐますか。尤も同じ卒業  
をするものとはいつてもブルの子な  
んか問題外のわけですが、プロの子  
で家や田地を賣つて學資金にしてゐ  
た連中の氣分はどんなですか。そ  
んな連中に限つて、就職は一層困難  
で、あらゆる手筈をたどつて、死に  
もの狂ひで就職運動をしなければな  
らぬにきまつてゐるわけですが、そ  
の辭最も就職率の悪いのも亦プロの  
子弟にきまつてゐるといふわけです  
が、今年もきつと亦さうした卒業生  
風景が出現するだらうと思つてゐま  
す。

全く行きづまつた世相ですね。僕  
は最近あらゆるものの極端な行き違  
りを感じてゐます。もう、どうにも  
なりませんね。こんな状態は、うみ  
が出て了はなくなりやりますまい  
よ。言ひかへれば、あらゆる治療が必要  
といふことになるかも知れません  
ね。

京極の白木屋が焼けたさうです  
ね。京極のキネマはどうです。何か  
面白いものがかかつてゐますか。僕  
はキネマの外に時々十錢ほど出して  
萬歳を見に行つたことを覚えてゐま  
すが、近頃の風景はどんなですか。  
僕はこちらの淺草へ長いこと失禮し  
てゐるので一度あの淺草の混雑の中  
を歩いて見たいと思つてゐます。世  
の中が不景氣になると、どうしたも

のかあゝした混雑の中を、やたらむ  
しように歩き度くて閉口ですよ。

東山に與ふ——

僕は君が好きだつた。京都にゐる  
間中君の姿を一日も見ないことはな  
かつた。そして、暇に委せて僕は君  
の巨大な体軀のあそこを遊び廻  
つたものだ。君の休から無数の松の  
木が生えてゐたが、僕はそれを遠く  
から眺めて見るのも好きだつたが、  
とりわけその松の間を歩いて見るこ  
とも好きだつた。君の体の表面には  
ところどころに、いろいろな寺や社  
が住つてゐるが、僕はその寺や社  
の中を歩き廻ることが好きだつた。然  
し、君を好いてゐたものは、僕一人  
ではなかつた。京に住居するあらゆる  
種類の人々は勿論、京を慕つて集  
るあらゆる種類の人々も亦、君が  
むしように好きだつたらしい。

僕は君の姿にわかれてから二ヶ年程  
になるが、一日として君の姿を思ひ  
出さぬ日はない。幸ひに君の健  
康を祈る。(一九三三・一・一七)

來信

△吳淞より

志賀 覺

前略御免下さい。  
入營期日が二月二十七日午前七時、  
歸家したのが午前二時半、家人との  
談もそこ／＼にして勇み立ちて砲六  
聯隊に入營致しました。入營後は出  
發準備で目の廻る様に忙がしさの中  
に萬事を兼へ出動命令を待つてゐる  
うち三月三日果然出動命令に接し三  
百二十一名國民の眞心なる萬歳々々

の聲に包まれ三日午前七時熊本ステ  
ーションを出發し驛々の溢れる許り  
の見送りに無我夢中門司へ走り門司  
市に二泊の後五日の午前九時カルカ  
ツク丸に上船し初めて祖國を出發致  
しました。  
玄海灘の荒波も「此處は御國を何百  
里」の軍歌に氣押されてか勇士の一  
人さへも船酔いを出し得ず未知の國へ  
／＼と白波けつて進んで参りまし  
た。

やがて海の水色急に黄色に濁り居る  
に不思議に思ひ尋ねれば早や船は  
揚子江の中に遣入り込んでゐるとの  
事兩岸に目を見張ればそれは支那人  
家といふ人家は一つ残らず砲撃によ  
り木葉微塵に破壊し盡され黒き灰と  
化して居るのにぎよつとさせられま  
した。

嗚呼偉なる哉我正義の砲撃の力斯く  
も成功し敵の膽を寒からしめたかと  
思ひ战友一同快哉を叫び又貴き同胞  
勇士の戦死を意義あらしめんと一同  
腕によりをかけた次第であります。  
籠の中に閉ぢ込められた小鳥の如き  
船中生活にあき／＼してゐる頃船は  
名もなき棧橋に横付けられ下船の命  
下に三日振りに陸の土を踏んだ次第  
です。

上陸して聞けば此處が吳淞の砲台の  
在りし所だそうです。御承知の如く  
此の砲台占領のため如何に我軍が苦  
戦したか戦跡を見て直ちに想像され  
るのであります。

上流社會の人間が住む大夏も細民の  
小屋も一つも残らず焼き拂はれて所  
々に逃げ惑つた支那人の死体目もあ  
てられぬ有様です。聞けば我軍も此  
の砲台占領のため貴き三千の死傷者

を生ぜしめたとの一事にても想像さ  
れます。

然し今は全く平靜で便衣隊の出現の  
際發砲する位で大した事も有りませ  
ん實に厄介な便衣隊で一寸の作業に  
使ふ苦力の中に必ず一人位は混入し  
て居ります全く油断も隙も有りませ  
ん。

専門學校學生と云ふ所で小生唯今本  
部付となり事務をとらされて居て痛  
快な第一戰物語りの持合せも有りま  
せん。

其中又何か面白い事有り次第御通知  
申上げます。  
申し後れましたが學校の事に關して  
は種々御厚情に預り御禮の上上げ様  
も有りませぬ今後とも何卒よろしく  
御願申上げます終りに御健康を祈り  
擲筆致します。(七年三月十三日針塚  
校長宛)

學校だより

編輯者附記 志賀氏は今冬二月出征さ  
れた製絲二年の學生です

三月中のプログラム 三年生の講義は二  
月二十七日で終了し夫れから日曜と臨時  
休暇二日を経て三月二日から八日迄學年  
試験である、九日十日二日間補講があ  
り十二日には成績が發表され十五日に卒  
業式が舉行される、又一、二年生は三月  
十二日に終講し十七日から二十四日迄學  
年試験があり二十五日から春季休暇に入  
り三十一日に成績發表の豫定である。  
菅原治治氏の臨時講義 本會々員山梨縣  
農林技術師菅原治治氏は本年度卒業すべき  
養蠶科學生に對し蠶絲業法取扱その實際  
と特約養蠶組合指導に就いて一日間臨時  
講義をするために來校せられた。  
新入會員歡迎會(三月十二日) 午後二時  
から武道場に於て新しく同窓會に入會さ

る、本年度卒業生の歓迎会を開いた、午前の教授会で全部卒業と決定したので新入会員の間に「なごやかな気分が漲ぎつて居た、昨年は試験が済んだ其の日の此の會合を開いたが演壇に掛つどの學生も不安らしい口吻を洩らして如何も此の會合の趣旨に「しつくりしない、實際各自誰でもパスしないと思ふものもあるまいが公表されない間はなごやかに未だどことなく束縛されて居る感じがしてか玲瓏たる朗らかさを持たないものである。

本年は會期が圖に中つたと見えて雨の降る大變寒い日であつたが明るい気分が各科全部と云ふて良い程の出席率である。松村理事長の挨拶に始まり林、倉澤各理事、會の本質に就て説明を述べ濱井高木、金崎竹内氏等の先輩が感想を語り猪坂氏は面白い慢談から出發して例によつて例の如く「生絲の國」雜誌の宣傳公告をなし新入会員の元氣溼潤たる所感があつて最後に理事長の閉會の辭で和氣霽々の中に會を終つた、松村氏は卒業生のために有益な處世訓をプリントにして來て配布されたが獨り新卒業生ばかりで無く誰にも有益な教訓であつた。

卒業式舉行(三月十五日) 本校第十九回卒業式が本日午前十時半から母校々々に於て舉行された、本年度卒業すべき人員は養蠶科三十五名製絲科三十八名紡績科十三名計八十六名である。何れも優秀の者たることを言を俟たない。臨席朝野の貴賓としては主に附近の樞要なる官公吏録々たる實業家に各新聞記者等で長野からは池田縣學務部長高橋登録課長水井録業試験場長が出席された、生徒父兄の出席は平年に比べて思ひなしか些ない様に見えた之も時代相現の一端かも知れない、同窓會員も少く特に母校附近だけにとまづ居たことも一層此の式を飾しく見せて居た、從來學校から會員全部に招待状を出したものであつたが千曲時報が出來てから其の紙上に公告するに止めて招待状の煩を廢して了つた、よく「僕

の所へ招待状が來ない」等と不平の聲を聞くが來年からはもつとドンドン來て此の式を一層盛大にして貰ひ度いものである。

校長の式辭は例に依つて頗る嚴肅莊重なものである成澤市長の祝辭にはユーモア拘すべきものがあり伊藤商業會議所會頭は過去に於ける百戰錬磨の忍苦を展開し倉澤蠶種聯合會會長は蠶絲業の將來をトシ業界に鹿嶋立つ青年に教ふる等一時間に亘つて感想演説があつた。

祝辭毎に「未曾有の多難」を滿喫させられた學生は答辭に於て寧ろ此の機會に出づるを光榮と信じ活躍奮闘すると精一杯な元氣を見せたことは感す。

式が終つて來賓に簡単な夕食を供し午後卒業生の招待による謝恩會が催された。

新入學者 入學試験は三月二十日執行された、入學志願者は昨年度から激増して次の如き數字を示して居る。

本年度	昨年度
養蠶科 一七一	二一八
製絲科 一五八	二一〇
紡績科 八四	七七
合計 四一三	五〇五

昨年度に比して本年は約一〇〇名不足したわけである、昨年から試験科目が英語數學と二科目だけになつた安きにつくと云ふ志願者の心理が多分に手傳つて急に殖えたかも知れない、又一面の觀測では不況の影響に依り成可く近くで専門程度教育を受くるものが多くなつたとも觀られて居る、即ち専門學校の地方分散の實が擧つて來たわけである。

學科が英語數學と限られたので實業學校の入学が頗る困難になつた、本年の實績をほのかにきくと各科得點六七十帯以内に僅かに一、二名の實業學校出があるばかりで何れも當選圏内に入つて居ないとのことである、現在の制度では無試験入學の道以外實業學校から入るには豫備校等に於て相當の努力を要すると思ふ、

四百余名中二十八日詮衡の結果入學許可となつた人員は次の通りである。

無試験合格	受験合格
養蠶科 九	三五
製絲科 五	三四
紡績科 二	二一
合計 一六	九〇

無試験入學志願者は實業學校出の方がはるかに多かつたが本年は中學出の優秀者も多數にあつて素質は愈々向上される感があつた。

校内科長の移動 校内科長の移動が次の如く發表された。

生徒主事兼教務課長 井上教授  
養蠶科長 遠藤教授  
長年養蠶科長であつた井上教授が辭されて其後を遠藤教授が襲ひ又教務課長であつた早川教授が自由の身となつたのである。元の學生課が教務課に移り其の學生課室が早川教授の居室となつた。

事變應召者 今回の兩事變に應召せられた本會々員を各支部に依頼して調査した所回答のあつた支部は鳴友、丹後、福島、山陽、熊本、北信、東海、埼玉、龍川、茨城十支部で左記五氏である。

上高井蠶業學校 古越光明氏(蠶一四)  
松本歩兵第五十聯隊第十中隊  
上高井郡須坂町敷町  
神林浩三氏(紡四)  
宇都宮團重兵第十四大隊第二中隊三  
鹿島農學校 川島龍太郎氏(蠶二二)  
水戸歩兵第二聯隊補充編成第二中隊  
長野縣蠶業取締所福局支所  
西原淳一氏(蠶十七)  
不明  
④渡邊製絲所 御子榮義之氏(絲一三)  
不明  
其他 母校教授森山二郎氏が病氣のため退職せられた、千曲時報の編輯主任者として特に關係深く惜しみて余りあるが御病氣の爲であるから之ばかりは致し方無い、切に御快癒の早からんことを祈つてやまない。(Y、K、生)

御挨拶 森山生

甚だ唐突でありましたが小生此度官を辭し同時に本誌編輯も辭することになりまして、これまでいろいろと御援助賜はりし諸兄に對し誠に申譯ない次第ですが何れ御厚志に報ゆる時機もあることと自重して居ります、發表と同時に御手紙賜はり御心配下さつた方々に満足な返事も差上げず失禮いたしましたが少しく考ふるところもありましたので紙上を以つて御挨拶を御覧下さいませう御願ひいたします。

辭するに際し今日まで陰に陽に御援助下さつた御厚情を謝し併せて向後も相變らず御指教下さいませう御願ひ申し上げます。

茲に希望あり M 生

本誌は一昨年の春賑々の聲をあげてから今日まで丁度二年、初代の加美氏が辭した後を受けて自分が二代目の乳母となつたのは一昨年の暮である、それから本誌まで或は巻頭言に或は編輯に自分の歩みは大方の御認めを得たことと信じる。その間を通して觀察するところ、本誌を愛し本誌に關心を持つ方はすべてこれ同窓を愛し母校を愛する人である、逆定理必ずしも眞ではないが千曲會員たるもの須く本誌を愛し須く團結しなければならぬ。

本誌を愛することは本誌を利用することだ、物の價値は大ききや古きやレツテにあるのぢない、その活用される程度にある。

これ以上くどくどく申述べる必要はない、三代目乳母を督して本誌の利用と會員の發展とに努めて頂きたいものである、自分は病氣の手前暫く筆を捨つるつもりであるが腕まで捨けるつもりはないから又の日、本誌に盡すことも出來るであらう、本誌に別れるに際して茲に希望ありと爾言。

辭命 上田蠶絲專門學校教授 林 貞三  
陸高高等官五等(二月二日內閣)  
上田蠶絲專門學校教授 森山二郎  
依願免本官(三月三十日內閣)

編輯室より

今月號は近頃にならぬ原稿不足でありました。これは時期が恰も年度變りの繁忙時なので原稿をお書き下さる暇がなかつたためだらうと思ひますが、どうか來月號からうんと御投稿を願ひます。

× × ×  
それに近來支部の通信がさつぱり載けません。支部の消息は時報が會員親睦の媒たるに極めて大切なものと考へますから毎月少なくとも二三支部宛は登載致したと思ひます。各支部通信員の方に是非御援助を願ひます。

× × ×  
卒業式も終り本會も茲に又新に九十名の新會員を迎へて千三百名の大世界となりました。本會並に母校發展のため慶賀に堪へません。益々會員相互の親睦を厚うし愈々會の結束を鞏固にすべく全會員の御協力を祈ります。